

出身大学の卒業生らが集まる校友会を通じて、社会貢献活動に励むシニアが目立つようになってきた。子どもへの運動指導や国際交流、市民講座の開催など多彩。旧交を温めるだけでなく、社会との関わりを強く意識しているよう

「よろしくお願いします」。小学生の元気な声が体育館に響く。笑顔で応じたのはシニアの男女10人。タオルを両手で引っ張りながら、体をねじったり、手を上げたりする動作をみせる。一緒に体を動かしてもらいつつ、あいさつやお辞儀の仕方も教えていく。

指南役の男女は早稲田大学の校友会支部、武蔵野稲門会の有志だ。地元・東京都武蔵野市の補助を受けて年に数回、体幹を鍛える運動や礼儀の大切さを教える「マナーキッズ教室」を市内の千川小学校と風の子保育園で開いている。

メンバーの一人、山口光朗さん(74)は元銀行員。現役時代は仕事が忙しかったが、定年を迎えた60歳の頃、時間にゆとりができて入会した。当初は野球の早慶戦の応援などを楽しんでしたが、次第に仲間内だけの集まりに物足りなさを感

セカンドステージ

大学の「校友会」で社会貢献

子どもに運動・マナー指導や市民講座開催

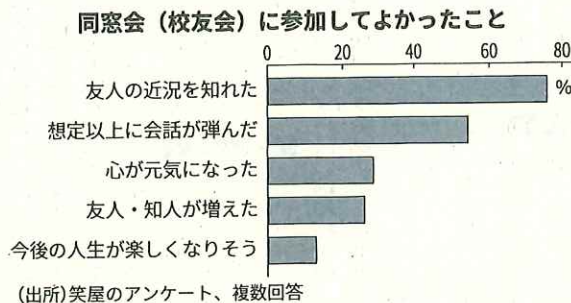


武蔵野稲門会の有志は体幹を鍛える運動を子どもに教える活動も(東京都武蔵野市、2018年に開いた教室)

卒業生集い地域に恩返し

「お世話になった社会にお返しをしたかった。最初はいさつがでなかった子が次回はできるようにする姿を見ると、やってよかったと思う」と山口さん。校友会という、懇親会や運動部の試合観戦が一般的。ただ山口さんのように社会と接点を持つ活動を望む人も珍しくない。名城大学校友会では名古屋市内にある校友会館を一般に開放し、市民公開講座を開いてきた。大学の教授らを講師に招き、消費税や自動車運転技術の動向といった社会的にも関心の高いテーマを話してもらっている。これまでに13回開き、毎回50人以上が参加する。

講義を提案した一人が山田弥一さん(75)。愛知県警を60歳で退職後、行政書士の資格を取り個人事務所



定年退職など入会の契機に

定年退職など人生の節目を迎えたり、時間的余裕ができたときが校友会に入る契機になりやすいようだ。校友会活動を支援する笑屋(東京・千代田)が500人に聞いた同窓会(校友会)アンケートによると、行きたいタイミングの1位は「年齢の節目」で39%。次が「自分の時間ができた時」の20%だった。参加してよかったことは「友人の近況を知れた」「想定以上に会話が弾んだ」「心が元気になった」が上位。比較的気軽に参加できる点を受けているようだ。笑屋の真田幸次社長は「卒業生を講演会などイベントに招くホームカミングデーを開く大学が増えた」と話す。少子化で経営が厳しいなか、卒業生とのつながりを強め大学の価値を高める狙い。大学と卒業生の距離が縮まれば、校友会もより身近になりそうだ。(高橋敬治)

れている。何か恩返しをしたかった」と語る。中央大学学員日華友好会は国際交流に力を尽くしてきた。学員は中央大の卒業生のこと。太平洋戦争の混乱で台湾に帰らざるを得なくなった元留学生のため、大学が1999年に台北で特別卒業式を開いたのをきっかけに設立された。留学生との交流のほか、現地の公園などに桜の木を植える植樹活動を続けてきた。

町田武さん(80)は60歳で印刷会社を定年退職。台湾との縁はなかったが、友人に誘われて活動に加わった。植樹祭などで現地を訪れたのは30回近い。「少しでもお役に立てればうれしい」と町田さん。こうした活動もあって台湾の10大学が母校の協定校となり、学生や教員同士の交流も進んでいるという。最近では新型コロナウイルスの感染拡大を受け、こうした活動は中断を余儀なくされているところがほとんどだ。ただ「感染状況が落ち着けば、ぜひ再開したい」(武蔵野稲門会の山口さん)というのが参加者に共通する思いだ。

校友会は高校などにもあがるが、全国規模の組織を持つ大学の校友会は居住地を問わず参加しやすい。仕事一筋だった男性が定年後に地域活動をしたくても、どこに行けばいいかわからないケースは多い。気心の知れた仲間がいる大学の校友会はそうしたシニアが求める次の居場所になりやすいかもしれない。